

## 2021年度新着資料紹介

### —生活文化関係資料を中心に—

尾曲香織・舟山直治

Key Words

学生スポーツ (Student sports)、移住 (Immigration)、婚礼衣装 (Bridal dress)、利尻島 (Rishiri Island)、食生活 (Dietary customs)

## 1 はじめに

本稿では、2021年度中に受け入れた生活文化に関する資料のうち、筆者が担当した40件40点について、それぞれの受け入れまでの経緯、資料の特徴を記述する。それに加え、寄贈して下さった各家の来歴についても紹介する。各家の来歴は、資料を取り巻く時代や所有・使用した人々の状況の記録を目的としている。

北海道博物館及びその前身の一つである北海道開拓記念館の収蔵資料のうち、「生活」に分類される資料は、明治期以降の北海道の人々の暮らしにまつわるモノを中心としている。これらは、寄贈者や資料を使用した人物がいつ、どのような社会状況の中で、なぜそれらを使用し、保管してきたのかといった情報が不足したものもあり、展示する際には資料の外形や素材から理解できることを中心に紹介せざるを得ないことが少なくない。これでは人々の暮らしを十分に理解できるとは言えず、北海道の生活文化を示す資料として十分とはいえない。そのため、資料とともにより具体的な周辺情報を残すことから、博物館での生活文化関係資料の収集に欠かせないことから、寄贈して下さった各家の状況も記述する。

なお、2021年12月までに受け入れが決定しているものの、手続きが終了していない資料もあることを申し添える。

## 2 鳴原家資料

### (1) 受け入れまでの経緯

鳴原家資料は、北海道帝国大学ホッケー部の楯、出征に際し用意された寄せ書きのある日章旗のほか、写真等計37件37点である(表1)。このうち31件31点は記録資料として、6件6点を生活資料として受け入れた。受け入れの経緯は次の通りである。

寄贈者である勅使河原みどり氏より2020年4月19日に

電話にて寄贈を希望する連絡をいただいた。後日尾曲が資料を実見し、受け入れが必要であると判断し、2021年1月27日の資料審査会に諮り、承認された。なお、これらの資料は、寄贈者の勅使河原氏の父方の実家、鳴原家に関する資料であることから、(2)では鳴原家の概要を記述する。

### (2) 鳴原家の概要

寄贈者の勅使河原みどり氏の祖父、鳴原義治氏は福島県田村郡移村(現在の福島県田村市)にて、佐藤熊太郎、モト夫妻の次男として1888年に生まれた。義治氏は獣医師の資格を持ち、軍医として働いていた。祖母の鳴原こきん氏は鳴原助右衛門、みつ夫妻の長女として宮城県で1892年に生まれ、1911年に宮城県尋常師範学校女子部を卒業し、小学校教諭として働いていた。二人は義治氏が婿入りするかたちで1908年に結婚した。その後義治氏の転勤のため、こきん氏は退職し、二人は札幌へと移住した。

義治、こきん夫妻の間には8人の子がおり、1914年生まれの長男の助義氏が北海道帝国大学ホッケー部に所属していた。助義氏は北海道帝国大学理学部物理学科を卒業後、1942年には同学科の研究時補助、1944年に大阪帝国大学産業科学研究所の講師、翌年に助教授となったあと、1946年に亡くなった。戦地に赴いた時期は判然としないが、寄贈者からの聞き取りによれば、戦地での過酷な生活により体調を崩しがちになり、その影響で亡くなったという。

なお寄贈者は三男の娘にあたり、助義氏は伯父である。

### (3) 資料の特徴

資料の一覧及び詳細は表1のとおりである。このうち2番のアルバムには、1953年12月24日から26日かけて、クリスマス家族で楽しむ様子の写真も含まれている。床の間の前にクリスマスツリーを配置し、天井には

紙テープで装飾をするなど、当時の様子うかがえる。4番の北海中学卒業記念の写真アルバムは助義氏のもの、6番の宮城県農学校卒業三十周年記念の写真アルバムは義治氏のものである。

前項で述べた通り、長男の助義氏が北海道帝国大学に通い、ホッケー部に加入していたため、32番の帝大ホッケーリーグ戦の楯が残されていた。また、寄せ書きの入った日章旗も、助義氏宛であり、そのうち一つはホッケー部の友人たちからのものである。当時の学生が勉学だけでなくスポーツも楽しんでいて、その一方で、在学中ではないかもしれないが、戦地に向かわなければならなかったという当時の状況うかがわれる資料である。

### 3 前川家資料

#### (1) 受け入れまでの経緯

2021年3月17日に尾曲が電話にて瀧美和子氏より丸帯の寄贈希望の連絡をいただいた。資料の来歴を聞き取り、後日実見および追加の聞き取り調査を実施。聞き取った内容から、受け入れが必要と判断し、8月4日の資料審査会に諮り、受け入れが承認された。収蔵番号は186596 (写真1)。

#### (2) 前川家概要

今回寄贈された丸帯は、瀧氏の祖母前川チオ氏 (1886年生) が故郷の福井より、北海道移住の際に持ち込み保管していたものである。そのため、ここではチオ氏が丸帯を使用してから美和子氏にわたるまでの経緯を記述する。

チオ氏は福井で前川善作氏 (1882年生、福井県勝山市平泉寺町字平泉寺出身) と結婚し、1905年中川郡洞寒村字セイシビラに移住、1910年に網走郡女満別村に転居し、1915年に美幌町美禽に転居した。各地で小作人として生計を立てており、1919年12月に一度福井県平泉寺へと引揚げた。1922年5月に美幌町に再度移住し、農業を営んだ。特に小豆の大量生産に成功したようで、瀧氏によれば、「小豆 (しょうず) の前川」として知られていたという。

1939年には旅館業に転業し、カネキュウ旅館として営業していたが、火事で旅館の裏側が焼けたことを契機として建て替えてビホロホテルと改称し、1992年まで営業を続けた。

瀧氏によれば、チオ氏は縫い物が得意な女性で、小切れをはいで上手に接ぎ、座布団やそろばん袋を作ってくれたという。また、戦時中には意図が手に入りにくいことから、知人から蚕をもらってきて育て、糸を工面した。

寄贈を希望した丸帯は、最初の移住あるいは再移住の際いずれかは判然としないが、故郷である福井から持ち込み、北海道の住まいで保管されていた。チオ氏が亡くなった後、瀧氏の父方の伯母が預かっていたが、後年瀧氏に譲渡されたものである。

#### (3) 丸帯の特徴

寸法は幅330mm、長さ3764mmである。柄は鶴、菊、松、桔梗などで、緑地に金色の糸で模様が織られている。丸帯のため両面に入っている。

婚礼用であることから、使用感はほぼない。

## 4 上田家資料

#### (1) 資料収集の経緯

寄贈者である滝沢恵子氏が2021年3月10日に来館された際、資料2点を寄贈したい旨連絡があった。新型コロナウイルス感染症の拡大状況等を鑑み、後日ご自宅にうかがい製麺機1点およびかんじき1点の実見および聞き取り調査を実施した。聞き取った内容から、受け入れが必要であると判断し、同年8月4日の資料審査会に諮り、承認された。収蔵番号は186597 (写真2)、186598 (写真3)。

#### (2) 上田家概要

寄贈者である滝沢恵子氏 (1948年生) は利尻島出身であり、寄贈資料はいずれも利尻島で使用されていたものである。ここでは、恵子氏から聞き取った上田家の歴史について記述する。

恵子氏の父上田藤一郎氏 (1908年生) は利尻町石崎出身である。その親が青森県の岩崎村 (今の深浦町) から利尻へと移住した。藤一郎氏は小樽高等商業学校 (現在の小樽商科大学) に進学したため一度小樽へと移っている。母寺島ミサヲ氏 (1908年生) は利尻町鬼脇出身であり、ミサヲ氏の祖父母の代から移住したと伝えられている。富山県から移住していたことから、ミサヲ氏の姉はそれが縁で富山の家に嫁いだ。そのことも影響し、ミサヲ氏は富山の女学校 (現在の富山県立富山女子高等学校) に通った。卒業後利尻に戻り、結婚するまで鬼脇や南浜で小学校の教員を勤めた。

両親の結婚後、1935年に藤一郎氏が新田ベニヤという会社の大連支社で勤務することになり、1947年に引揚げるまで、夫婦は共に大連で生活した。その間6人の子どもをもうけており、1936年に生まれた長女の時は、利尻まで帰ってきて出産したという。

一家は1947年に利尻へと引揚げた。藤一郎氏が大連在住日本人の世話人になっていたため、大連から日本行

きの最後の船に乗ったという。1948年に恵子氏が、その後弟も生まれている。

利尻に帰ってきてから、藤一郎氏は魚の加工などに従事していたが、小樽の河辺石油の社長に声をかけられ、北見枝幸の支店で働くことになった。当時同居していた藤一郎氏の母と妻であるミサヲ氏、そして子どもたちは利尻に残ったため、単身赴任となった。

恵子氏を含め兄弟全員、高校進学の際小樽で下宿した。下宿先は、父である藤一郎氏が小樽高等商業学校に通っていた時以来の友人宅であった。恵子氏の弟が高校に入る1965年に利尻の家を片付け、母は夫のいる北見枝幸へと移った。製麵機、かんじきともその時に枝幸へと持って行った。

### (3) 資料の特徴

#### ①製麵機

大きさは365×518×347（奥行×幅×高さ、単位mm）。製造元などの記載はない。

恵子氏の兄によれば、戦後、利尻では米は配給制で、普段それほど食べられないものの、小麦粉は容易に手に入ったので、すいとん、うどんなどを作っていたという。恵子氏の兄が子どもの頃手伝いとして、この製麵機をつかってうどんを作った。

#### ②かんじき

こちらも利尻で使っていたものである。大きさは502×210×6（長さ×幅×高さ、単位mm）。状態は良く、破損などもない。部材は針金を用いて固定されている。

戦後の上田家では、恵子氏の祖父が植林した山の木を、積もった雪が固くなる3～4月に次の冬の燃料用として伐り出していた。その際に祖父がこのかんじきを履いて橇を曳き、橇に木を載せて家まで帰った。夏にはその丸太を伐ってくれる人たちが訪れていた。その人たちが切った木を、薪割りするのが子どもたちの夏休みの仕事だった。木は家の納屋に積み上げて保管し、一冬それでしのいだという。

## 5 おわりに

本稿では資料および各家の来歴を概括的に記した。当館で主に「生活」と分類される資料のほとんどが、身近にある道具である。かつては手作りだったものも、工業製品に置き換わり、さらに誰もが持っている道具となっており、外形の比較検討やそれに伴う地域性の把握といった視点での研究は難しい。また、収蔵庫もすでに多くの資料を受け入れているため狭隘であり、寄贈の申し出を断る例は少なくない。

このようななかで、一つ一つの資料をめぐる社会的状

況、家庭の様子など、情報を付加していくことで、資料を通し、かつて北海道で暮らした人々の生活、心情を残すことが重要であろう。なお、本稿で紹介した資料は、2022年度中に期間限定で展示する予定である。

### 謝辞

資料を寄贈していただきました勅使河原みどり様、瀧美和子様、滝沢恵子様には大変お世話になりました。また、資料整理にあたり北海道博物館三浦泰之氏にご協力いただきました。記して厚く御礼申し上げます。



写真1



写真2



写真3

表2 勅使河原家寄贈資料一覧

番号	収蔵番号	資 料 名	点数	摘 要
1	186559	写真アルバム	1	スクラップブックを利用。昭和11年～12年頃
2	186560	写真アルバム	1	黒い表紙。昭和9年～15年頃
3	186561	写真アルバム	1	緑の表紙。昭和28年～30年
4	186562	写真アルバム 北海中学校 第二十七回卒業記念	1	昭和7年3月発行
5	186563	写真アルバム 在営記念	1	表紙に「在営記念」「羅南歩兵第七十三聯隊」と印字あり
6	186564	写真アルバム 宮城県農学校卒業三十週年記念 獣医科 初老会	1	皇紀2601年(昭和16年)発行
7	186565	写真(スーツ姿の男性2人)	1	紙焼き写真
8	186566	写真(煙草を吸う男子学生2人)	1	紙焼き写真
9	186567	写真(野原に座る男女7人)	1	紙焼き写真
10	186568	写真(軍服姿の男性)	1	紙焼き写真
11	186569	写真(印刷室の男子学生4人)	1	紙焼き写真。裏面に「印刷」「紙」と鉛筆書きあり
12	186570	写真(札幌聾話学校から出る車を見送る児童たち)	1	紙焼き写真。裏に「昭和十一年十月二日」「人江」「27」と鉛筆書きあり。表面左下に「札幌三春久平」と刻字あり。昭和天皇北海道巡幸関係
13	186571	写真(おいらん淵)	1	紙焼き写真。スクラップブックの写真アルバムに同じ写真あり
14	186572	写真(帝国学士院賞受賞関係の記念品)	1	紙焼き写真。香炉とおぼしき記念品の本体に「贈／茅先生／門下生一同」「学士院賞御受賞記念」「昭和十七年五月十三日」と印字あり
15	186573	写真(帝国学士院賞受賞関係の記念品)	1	紙焼き写真。香炉とおぼしき記念品を上部から撮影
16	186574	写真 中島公園	1	紙焼き写真。表面左下に「札幌三春久平」と刻字あり。裏面に「昭和十一年九月中旬／中島公園」「12」と鉛筆書きあり
17	186575	写真(スキーを履いた男性6人)	1	紙焼き写真
18	186576	写真 設立一週年記念日 聾啞教育福祉協会札幌支部	1	紙焼き写真。集合写真。裏面に「二月六日」「嶋原義雄様」と鉛筆書きあり
19	186577	写真 豊平川	1	紙焼き写真。土手に座る学生服姿の男性2人。裏面に「昭和十五年五月／豊平川」「菅原正長 二十五才／義雄 二十四才」とペン書きあり
20	186578	写真 大通	1	紙焼き写真。芝生に座る和服姿の男性1人。裏面に「昭和十五／大通／松浦宣勝」と鉛筆書きあり
21	186579	写真(理学部玄関ヨリポプラ並木ヲ見ル)	1	紙焼き写真。裏面に「昭和 年／北海道帝大」。スクラップブックの写真アルバムに同じ写真あり
22	186580	写真(ボートを漕ぐ男性)	1	紙焼き写真。裏面に「27」とスタンプあり
23	186581	写真(学生服姿の男性)	1	紙焼き写真。裏面に「昭和十五年／六月六日／盛岡市北九〇／縣立盲啞学校／井上長一／木工部」とペン書きあり
24	186582	写真(軍服姿の男性)	1	紙焼き写真。裏面に「贈／北部二〇〇部隊札幌隊本部／陸軍軍属／渡辺順一」「19.10.1」とペン書きあり
25	186583	写真(詰襟服を着た男性)	1	紙焼き写真。裏面に「昭和十七年／六月／高橋茂」と鉛筆書きあり
26	186584	写真(椅子に座る坊主頭の男児2人)	1	紙焼き写真。裏面に「昭和十九年七月二十五日／中山彦司／四才／〃／勝治／一才」と鉛筆書きあり
27	186585	写真(スーツ姿の男性と詰襟に脚絆と下駄を履く男性)	1	紙焼き写真。裏面に「17」と鉛筆書きあり
28	186586	写真 大阪聾啞教育福祉協会	1	紙焼き写真。集合写真。裏面に「昭和十八年八月十五日／記念／大阪聾啞教育福祉協会／藤本先生／近藤校長」とペン書きあり

29	186587	写真 登別温泉	1	紙焼き写真。男性5人、女性3人の集合写真、裏面に「昭和十九年六月十六日／登別温泉」「嶋原さん」と鉛筆書きあり
30	186588	写真(記念写真)	1	紙焼き写真。集合写真。裏に「昭和十八年一月五日／記念／近藤□」と鉛筆書きあり
31	186589	写真 体操	1	紙焼き写真。校舎の前で男女の学生たちが右手を握り、左手は腰に手を当てて体をひねっている。校舎は北海中学か。裏面に「体操」と鉛筆書きあり
32	186590	帝大ホッケーリーグ戦楯	1	1937年のもの、木箱入り
33	186591	日章旗	1	名前やメッセージが書かれたもの
34	186592	日章旗	1	北大ホッケー部の友人たちからメッセージが書かれたもの
35	186593	大礼記念章	1	大正四年十一月のもの
36	186594	大礼記念章	1	昭和三年十一月のもの
37	186595	カフスポタン	1	一対、箱入り

## Introduction of Objects Entering Museum Collection during 2021 Fiscal Year

### Focusing on Articles Related to Folklife

OMAGARI Kaori and FUNAYAMA Naoji

---

This paper focuses upon key objects which have been registered into the Hokkaido Museum collection in 2021.

The Teshigahara family donated items including a shield belonging to the Hokkaido Imperial University Hockey Club and a collection of messages given to the shield's owner when he was deployed to the front, as well as an album of photographs taken during and after the Second World War. The former are important materials demonstrating the students' enjoyment of sports during wartime, and the necessity for the young man to go to war. The album also contains photographs of a family Christmas party held in Sapporo in 1953, providing valuable insight into lifestyle culture of that era.

The Takizawa family donated snowshoes and a noodle-making machine that were used on Rishiri

Island post-Second World War. In particular, the noodle-making machine facilitates understanding of changes to dietary customs on Rishiri shortly after the war, a period when it is said that wheat was more readily available than rice.

The Taki family donated a maru-obi (heavy, formal women's one-piece sash). It was brought to Hokkaido by the donor's grandmother when she moved from her homeland of Fukui during the Meiji period (1868-1912). As this style of sash is generally used during wedding ceremonies, it shows very little signs of use. We interpret that the owner likely expected some need for it at the time of moving.

As the people of each family have regarded these articles as important, and kept them over many years until the present, we have also recorded the background of each family.